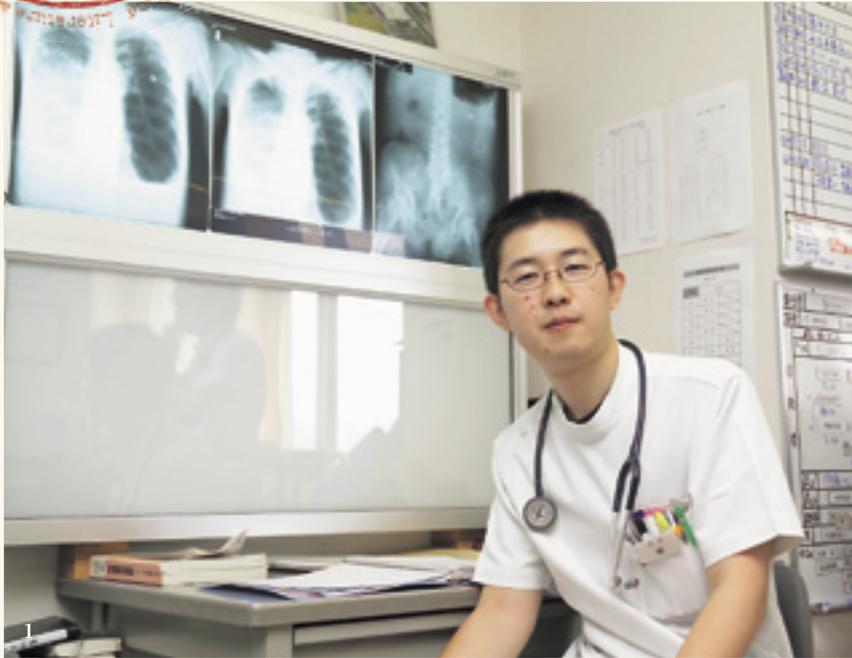


# 山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、  
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。  
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 ナースステーションの一角で患者さんのレントゲン写真をチェックする岸先生。どんなにキャリアを重ねても患者さんの立場に立って、しっかり診てきちんと話のできる医者でありたいと語ってくれた。

2 週に一度は外来も担当している岸先生。初めての患者さんにはこうして問診をして身体の状態をしっかりと把握。岸先生の実直な話しぶりと一緒に懸命な仕事ぶりにはとても好感がもたれた。

3 看護師さんとのコミュニケーションは、医者としての重要な仕事のひとつ。患者さんの状態の聞き取りをしたり、投薬等の指示を出したり。サッカー同様、医療現場においてもチームワークは欠かせない。

## 医者という仕事は予想していた以上にハード。 でも、意外に疲れないうのは日々充実しているから。

岸宏幸 山形済生病院 内科呼吸器科医師

山形市内の山形済生病院に今回のOBランナー岸宏幸さんを訪ねた。内科呼吸器科の医師として働く岸先生は、卒後臨床研修制度といって、医学部を卒業後さらに2年間、内科や外科、小児科等さまざまな科での臨床研修が義務づけられた制度の一回生。大学病院とこの済生病院での卒後臨床研修を経て、晴れて医師として患者さんを任せてもらえるようになった。もちろん、呼吸器科の中でも一番の若手、10歳以上年上のベテラン先輩医師たちの指導のもと、ハードながらも充実した毎日を送っているという。

岸先生が医学部への進学を決めたのは高校3年生になってから。周囲に看護師や薬剤師がいたこともあって子どもの頃から病

院に出入りする機会が多く、何となく自分も医療関係の仕事に就きたいという思いがあったという。それが医師という方向に固まったのは高校の先生の勧めがあったから。「正直なところ、医師としての情熱や意欲が芽生えてきたのは医学部で学び始めてからなんです。」と照れる岸先生。専門に呼吸器科を選んだのは、直接、老若男女の命に関わる分野だから。現在は、病棟勤務を中心に週に一度の外来も担当している。医師の仕事は、朝早くから夜遅くまで続き、休日でも気になる患者さんがいれば出勤することも少なくないという予想以上のハードさ。そんな岸先生の活力源はというと、治療を終えて退院していく患者さんからの「ありがとう」という一言とサッカーJ2

リーグ・モンテディオ山形の活躍だという。たまの休日には熱烈サポーターとして競技場に足を運ぶことも。とても穏やかな風貌の岸先生がどんなサポーターぶりを見せるのか非常に興味深い気がした。

そんな岸先生の大学時代の思い出話を聞いてみると、忙しい勉強の合間に熱中したサークル活動やアルバイトをあげた。特に、サークル活動は中学・高校と続けてきた卓球部に所属、学部や大学の垣根を越えた交流がとても楽しかった。「勉強が忙しいといってもまだまだ時間的余裕があるのが大学時代。スポーツやボランティア、アルバイト等、とにかくいろんなことに首を突っ込んでみるといいんじゃないかな」と後輩たちへのメッセージを結んだ。

探求の成果